対人魅力と性格の類似性との関係

○梶原直樹¹・梶原和子²

(¹日本女子大学・²下野市立祇園小学校)

キーワード: 対人魅力, 性格, 類似性

The relations between interpersonal attraction and similarity of personality

Naoki KAJIHARA¹, Kazuko KAJIHARA²

(¹Japan Women's University, ²Gion Elementary School)

Key words: interpersonal attraction, personality, similarity.

目 的

他者の魅力を評価するときに、態度や性格の類似度が高まるほど、魅力も高くなることが示されている (Byrne & Nelson, 1965; Byrne, Ervin, & Lamberth, 1970)。しかしそれは、われわれと、実際に好きな人との類似度は高く、嫌いな人とは低いということの意味するわけではない。

そこで、梶原・梶原 (2012) は、調査対象者による、実際に好きな人、嫌いな人、そして自分自身の三者の性格の評価から、そのようなことがいえるのかどうかを調べ、相対的には好きな人との類似度が高いという結果を得た。しかし、性格の評価が、すべて調査対象者によるものであったため、実際の性格との比較といえるかどうかは不明であった。そこで、本研究では、好きな人と嫌いな人の性格を、調査対象者ではなく、本人が評価したもので比較した。

方 法

調査対象者 調査の対象は、18名の大学生 (女性4名、男性18名) で、平均年齢は、19.2歳 (SD=0.9歳) であった。

調査項目 村上・村上 (1999) による主要5因子性格検査における、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の5項目を調査項目とした。外向性は、内向的と外向的、協調性は、冷たいと暖かい、勤勉性は、怠惰と勤勉、情緒安定性は、神経質と気楽、知性は、浅はかと思慮深い、を両端として5段階に区切り、評価スコアを、左から右へ1点から5点とした。

手続き はじめに主要5因子の説明をしたあと、その5項目について、調査対象者自身の性格を5段階で評価するように求めた。さらに、調査対象者により、好きな人と嫌いな人として選択された人にも、自分の性格を同じように評価させた。

結 果

5項目の5段階評価について、評価対象ごとに合計点を求めた。表1は、各評価対象のスコアの合計点の平均値と標準偏差を示している。この平均値について、1要因3水準の分散分析を行ったところ、評価対象の効果は有意であった ($F(2, 34)=5.64, p<.01$)。評価対象ごとのスコアの平均値について、LSD法による多重比較を行った結果、各対象のスコアの大小関係は、好き>嫌い、となった ($MSe=4.82, 5\%$ 水準)。調査対象者のスコアは、好きな人とも嫌いな人ともちがいがあるとはいえなかった。

表1 評価スコアの平均値と標準偏差 (n=18)

	評価対象		
	対象者	好き	嫌い
M	15.7	16.7	14.3
SD	2.7	2.9	3.6

次に、各対象間の差異の大きさを求めるため、評価対象ご

とに、5項目のそれぞれでスコアの差の絶対値を算出し、それらを合計した (表2)。この値について、1要因3水準の分散分析を行ったところ、評価対象間の効果は有意であった ($F(2, 34)=4.92, p<.05$)。そこで、評価対象間のスコアの差異の大きさの平均値について、LSD法による多重比較を行った結果、差異の大小関係は、|対象者-好き|<|対象者-嫌い|=|好き-嫌い|, となった ($MSe=1.10, 5\%$ 水準)。

表2 二者間のスコアの差異 (絶対値) の平

	評価対象間		
	対象者-好き	対象者-嫌い	好き-嫌い
M	5.7	6.6	6.7
SD	2.1	1.9	3.2

考 察

評価スコアからは、好きな人と嫌いな人との間には、ちがいが認められたが、調査対象者の性格は、好きな人とも嫌いな人とも、ちがいがあるとはいえないという結果になった。だが、調査対象者との評価スコアの差異は、嫌いな人を対象にしたときよりも、好きな人を対象にしたときの方が小さくなった。

これらの結果から、調査対象者の性格は、嫌いな人よりも、好きな人に近いといえる。つまり、その点では、自分と似たものの魅力が高くなるだけでなく、自分の好きな人は、自分に似ているともいえるだろう。たしかに、何らかの共通点があることは、お互いが知り合うきっかけとして、重要な要因になり得るものであるかもしれない。しかし、類似度の高さが、友人関係の維持や、その深化を左右するほどの重要性をもつものであるなら、もっと高い類似性があらわれるのではないだろうか。そうならなかったのは、自分自身によるものであれ、他者によるものであれ、似ている、あるいは異なるという判断が、全体的な類似度の程度によるのではなく、特定の部分に対する、主観的な印象によりなされるためであることが考えられる。もしそうであるなら、類似性の問題を、客観的なものと主観的なものとに分けて考える必要があるだろう。

引用文献

- Byrne, D., Ervin, C. R., & Lamberth, J. (1970). Continuity between the experimental study of attraction and "real life" computer dating. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 157-165.
- Byrne, D. & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 梶原直樹・梶原和子 (2012). 対人魅力と性格の類似性との関係. *日本心理学会第76大会発表論文集*, 2AMB11.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は5次元だった. *培風館*